

(研究ノート)

フランス語を教える、遊ぶ

宮原信

一般科

前任校を退職後、2年ほどある医科大学でフランス語を教え、その後、本学での公勤に応じて、常勤として受け入れてもらうことができた。それ以後8年間、本学での教員生活を中心としながら、他のいくつかの大学で、また機関で、フランス語との接触を保ち続けることができたのは、実に幸いなことだった。それに、これは世界が、日本がさまざまな面で大きく変わり、それとともに、日本における外国語の受容、教育という分野もまた、これまでにない新しい状況を迎えていた時期でもある。以下では、私自身の教場での体験を基本に据えながら、この間、日本の大学で一般に「第二外国語」と呼ばれるものの一つであるフランス語教育が置かれていた状況を振り返り、私なりに要約してみたいと思う。

(1) いくつかの発見：ここ半世紀ほど前から、外国語教育はさまざまな発展を遂げてきた。一般的な傾向としては、日本で従来とられてきた文法、書き言葉中心の方法では、日常的なコミュニケーションの場での能力養成にはつながりにくいという反省から、話し言葉の習得を直接の目的とした訓練が、重要視されるようになった。フランス語の場合も、フランス語のみによる直接教授、また、視聴覚教材を使用しての訓練がしばしば行われるようになった。私自身も、以前、なんかその種の試みを行ったこと

は、機会を得て報告したところでもある（「東京大学教養学部言語文化センター紀要13号 1992年」）。ただ、本学においては、そうした視聴覚的方式とはらず、音声よりは文字に頼り、文法習得を中心としながら進んでいく、より伝統的な方式に従うことにした。週一回90分の授業では、視聴覚方式をとってもあまり効果が上がらないと考えたし、また学習の第一の目標を口頭によるコミュニケーション能力に置かなかったからである。

フランス語の教授者なら誰でも - あるいは他の第二外国語の場合も通用するのではないかと予想されるが - 知っていることだが、文字、文法に主として依存する方式に従う場合には、1年間で一通りの文法事項を習得させ、2年目には、語学的にもまた内容も、比較的平易な、但し学習者の年齢にできるだけ見合ったフランス語のテキストを講読するのがふつうである。私も、こうした流れを原則として授業を進めたが、そのさい、特に1年次のクラスでは、これまでにない体験をいくつかしたので、それを記しておく。それによって、授業の進捗具合がスペース・ダウンし、ひいては、1年次、2年次を通じての教授方針に、かなりの変更を加えることになったからである。

i) フランス語学習者が最初につく困難のひとつは、「面倒な」動詞活用を記憶しなければならないことである。しかも、être (...である) / avoir (...を持つ) と

いった基本的な単語が「だからこそ」とも言えるらしいが、不規則な活用をするので、この面倒はいつそう大きなものになる。しかし、こうした基本的な動詞の変化を避けて通るわけにはいかないもので、とにかく、不定形と、それぞれの人称の「現在形」を暗記するよう要求する。多くの学習者が、それに応じてくれるが、一部の人はこの段階で暗記作業を怠り、そのために先に進めばいいほど、足かせがふえていく印象を持つ。そうした事態を防ぐため、私もかなりひんぱんに小テストを行ったが、その際、学習者が、動詞の部分だけではなく、主語である代名詞の部分についても、間違いを犯しうること気づいたのである。《 je suis / tu es / il est, elle est / nous sommes / vous êtes / ils sont, elles sont 》という系列において、テストの採点にさいしては、もつぱら suis, es, est といった動詞の部分に注目し、je, tu, il といった代名詞の部分は、いさかい間違いようがないという感覚で接していたのだが、実際には、代名詞の部分にもかなりの間違いが見られたのだ。そのうち特に多い過ちは、je, elles と綴るべきところを、それぞれ、ju, els とするものだった。はじめてこの種の綴りに接したときは、正直かなりの驚きだったが、考えてみれば、この過ちはむしろ自然であり、その可能性に予め気づかなかった方が悪いのかもしれない。特に前者の場合がそうだ。je, tu を発音した場合、それぞれの母音の部分は、発音記号で書けば [ə], [y] とははっきり違うのだが、日本人にとってこの二つは同じしやすい音である。もし両者をカタカナで書けば、[ジュ], [チュ] とでもなるだろうから、なおさらである。日本人の耳にとっては、je でなく ju と書く方が自然なのかもしれない。だから教える方としては、日本語の音 [ウ] との関係も考慮して、いたずらに過

ちをとがめ立てするのではなく、予め過ちの可能性に十分注意を喚起すべきだろう。そしてこの綴りの上での注意の喚起は、当然、[ə] という音、[y] という音の、よりていねいな訓練、説明ともつながるであろう。また、elles とすべきところを els としてしまう間違いも、il の複数形 ils との類似から、ある程度予測される間違いなのかもしれない。もっとも、単に不注意からの間違いならば、elle でなく el が現れてもよさそうだが、この誤りはあまり見られない。いずれにせよ、動詞の活用形の暗記を要求する際には、代名詞自体についても、その音と綴り、また両者の関係について十分時間をとった説明が行われるべきだろう。

(代名詞の綴りの過ちについては、むしろ、nous / vous とすべきところを、発音しない s を落として、nou / vou とするものも見られたが、それは私にとっても特に驚きではなかった。)

ii) 視聴覚方式による場合は、文字をあまり早い段階から覚えさせたり、文字を使って教えたりすることは、かえって学習の妨げになると考える教授者が多いが(特にフランス語を母語とする人に多い)、文法事項を順次に習得しながら進んでいくという、私が従っていた方式の場合、特に週一回90分授業という条件では、むしろ積極的に文字を活用すべきだろう。ただこの場合にも、私がなにげなく黒板に書く横文字が、必ずしも、学習者にとってはすぐに理解できるものではないという発見があった。というより、前列の方に座っていた何人かの学習者から、黒板の字がよく読みとれないという指摘を何度か受けたのである。これも、私にとっては、代名詞の綴りの間違いと同じように、一種の驚きだった。r という字を、時にはいわゆる筆記体で / r / と書いてみたり、時には活字体で / r / と書いてみたりす

るよくない癖はあるにしても、黒板に書く字は、なるべく
ていねいに、ゆっくり読みやすくとかかっていたのであれ
ば、なおさらだった。それに私の使う文字は、現在フラン
スの小学校で教えられ、多くのフランス人が用いている、
どちらかといえば丸っこい筆記体ではなく、しいて言えば
英語式文字とでも呼ぶべきもので、英語を勉強した人間に
はなんの問題もないと考えていたのである。「よく読みとれ
ない」と指摘した学習者に聞いてみると、そもそも中・高
等学校の段階で英語を学んだ際に、筆記体なるものを教え
られたことがないとのことだった（これはおこわかしこは信じ
難いことだが）。むろん、英文にせよ、仏文にせよ、ペン書
き、鉛筆書きの手紙などは、外国人にとって、書き手の筆
跡に慣れていない限り読みにくいのがむしろふつうである。
ただ、この場合はそれとは全く違う、至極単純な問題で、
要するにいくらはっきり書いても、活字体以外読めない、
というよりむしろ、黒板に書かれた文字は、活字体とまっ
たく同じ書体を用いない限りは、はじめから読めないもの
と決めてかかっているかのような印象すら受けた。むろん、
横文字の筆記体おはじめてと言うのは、クラスの一部に限
られていたがそれでも、以後は、よりゆっくり、ていねい
に書き、読みとれているかどうかを確かめながら進むこと
にした。

iii) また次の点も、1年次のクラスで私を驚かせたこ
とのひとつだった。それは、文法用語に関する知識の不足、
もしくは欠如である。文法用語といっても、「主語、述語、
(直接 / 間接) 目的語、名詞、動詞、形容詞…」といっ
たごく一般的なものを、ごくふつうの意味で用いるだけで
ある。それに、例えば、「属詞 attribut」といったフラン
ス語の文法教科書にはよく出てくる用語も、英語では一般

的に用いられず、それにフランス語を学ぶのにも特に必要
はないから除外する。それにも拘わらず、まれにいくつか
のこうした用語を説明に混ぜると、なにが腑に落ちない表
情になる。何人かの学習者にただしてみると、これも、英
語学習の際にはお目にかからなかった言葉なので、なんの
ことかよくわからないとのことだった。

iv) 最後にもう一つ、これは「発見」というよりは、以
前からあちこちのクラス、学校で体験していたことだが、
初歩の段階で、私にとまどいを覚えさせたことをあげてお
こう。それは、単語あるいは簡単な文章の読み方を学ぶ際
に、多くの学習者が、カセットテープの発音や、教授者の
発音を、自分の口を動かして繰り返しながら覚えようとす
るよりも、なんとか、片仮名でその音を表記しようと努め
ることだった。おそらくそれは、片仮名で記しておいて、
後でそれを見てすぐ言えるようにするためののだろうが、
私が、声に出して発音してみるように促しても、それには
応じようとはせず、もつぱら、「今のは片仮名ではどう書け
ばいいのかわか」と質問する。片仮名でなんとか似た音を写し
ておいて、それだけで安心しようとしているかのような印
象すら私は持った。私としては、片仮名で外国語の発音を
写すことを非難する気は毛頭ない。それどころか、初歩の
段階では学習の上で、大いに助けになる。しかしこれはあ
くまで補助的な手段であって、ましてや教室という場での
学習であれば、まずなによりも、自分の耳で聞いた音を、
自分の口で繰り返しながら記憶しようとするのが自然と思
えるのだが。

こうしたいくつかの「発見」、体験は、私がなんとはなし
に抱いていた前提、「フランス語を習得しようとする人は、

英語の発音、文字、文法に関して一通りの知識は持っているものだ」という考えをかなりの程度揺るがせるものだった。現在、我々の身の回りには、いわゆる和製英語を含めて、英語が広くいきわたっているのは事実だ。しかしこれは必ずしも、中・高校の段階で英語教育が重んじられていることを意味しない。つまり、同じヨーロッパの言語だからといって、フランス語への接近の下地ができていたとは限らず、まったく新しく外国語を習い始める学習者として、クラスにのぞくべきであることを私に教える結果となったのである。「第二外国語」という呼び方にはいろいろな意味合いが込められているが、はじめての外国語である英語学習で獲得した知識を利用できる「二番目に習う外国語」という考え方は、捨てなければならぬのかもしれない。

(2) 進捗目標をどこに設定すべきか：i) 1年生の場合：一般に大学でのフランス語学習の場合、初等文法と呼ばれるのは、「a b c の読み方」から始まって、「接続法」と呼ばれる動詞の形態、その用法までで、そこまで知っていれば、辞書を使いながら、新聞、雑誌、ふつうの小説、論説、論文などを、内容の難易は別として、読み解くことができる、というより、さまざまに「活用、変化している」語形の「原形」が見抜けるから、「辞書を引くことができる」、したがって、辞書を引く面倒さといわなければ、上にあげたようなテキストを「自力で」読み解くことができる。また、将来、音声面での訓練を積み、会話能力へとつなげることができるわけである。すでに述べたように、一般的なカリキュラムでは、一学年をかけてこれだけの知識を学習者は習得し、2年目は、「晴れて」、実際のテキストの講読へと進むのがふつうである。そして、2年を終わ

った段階で、「大学で一応フランス語を学んだ」と言えることになる。私もはじめの何年かは、こうしたペースを基本としていたが、やがて、(1) で述べたような驚き、とまどいを重ねるうちに、忠実にそうしたペースを守ってもあまり意味がないと考えるようになった。「接続法までは是が非でも」という方針は、どうしても無理を伴う。先に進むことを重視するあまり、覚えてもらいたい、理解してもらいたいといった多くの条項を、早足で駆け抜けなくてはならない。そのため、例えば、練習問題の大半は、教授者がさっさと行ってしまうといった、学習者のためになるとは思えない方式に従うのであれば、各人の予習復習にかなりの程度依存する必要が出てくる。つまり、問題は、自宅学習にどのくらいの時間を要求すべきか、要求できるか、という点でもある。結論から先に言おう。私はこの時間は「限りなくゼロに近く想定」しようと考えた。むしろ予習復習は必要なしと公言するわけではない。それどころか、「一日20分でも、30分でもいい、フランス語と向かい合うよう」すすめるが、それを実際に授業の際の一般的基準にすれば、必ず破綻が来る。それよりは、たとえ予習復習がまったく欠けている人間でも、とにかく週一度の授業時間に真剣に参加しさえすれば、フランス語に関する一定水準の知識を身につけることはできるようにしようと考えたのである。その際、多少とも予習復習の時間を自分で設けていれば、それだけ余裕が生じるのはもちろんである。(その余裕があり過ぎて、退屈するような場合には個人的な対応 - 例えば、後に触れる検定試験の受験をすすめるなど - をすることも考えたが、残念ながらそうした必要が生じることはごく稀だった。)

むしろこうすれば、授業の進捗ペースは大幅に落ち、ふ

つう12くらいのレッスンで構成されている初級文法の教科書を、一年間(実質的には8ヶ月くらい)かけて、半分以上よりやや多い、第7ないし8課くらいにまで辿り着くのがやっとなのである。ただ、本学のように、大半の学習者が、同じ第二外国語を1年、2年と続けて選択する場合には、1年次、2年次を通じての実際的なカリキュラムを組むことが可能である。というわけで、初級文法に属する事柄で、1年次の終わりになっても未学習のまま残った部分は、2年次に回すということで、進行速度を無理に速めることは避け、あたかも学習者の側に復習予習の時間が全くないかのような態勢で、毎回の授業このぞむことを原則とした。

ii) 2年生の場合: 上のようなわけで、2年目を迎えた学習者も、まだ完全には初級文法を終わっていないので、はじめの数週は、1年次で用いた教科書の残りのレッスンを学ぶために費やし、そのあとにかな適当なテキストの講読に入ることになる。ただ、学習者の心理としては、2年生になっても相変わらず「文法の続き」だけでは、あまりに新し味がなさ過ぎて、学習意欲を殺がれかねない。この際やはり、なんらかの形で、自分の力は1年次の時とは違うのだという感覚を持たせるのが得策だろうと私は考えた。そのための手段として私が取り上げたのは、多少の無理は承知の上でも、文法教科書とは違うなんらかのテキストを選び、それを読みながら初級文法の学び残した部分を学び、それと同時に、すでに知っている(筈の)部分を、改めて実際の文章の中で確認しながら、知識として定着させていくという方式である。

となると、教材としてのテキストの選択が重要となるが、私が実際に使用したものをいくつかあげながら、何が選択の基準となったかを振り返ってみよう。私に限らず、一般

的に、教材の選択に際して基準となるのは、語学的難易度と、学習者の関心を引きうるかどうかだろう。ただ、「語学的難易度」といっても、それは単に、「どの程度の頻度の語彙、表現が用いられているか」といったことだけではなく、「きちんとした」「不快を覚えない」フランス語であるかどうか(いずれも教授者の目から見た、主観的で曖昧な基準ではあるが)といった観点も含まれる。また、学習者の関心との関係については、二つの考え方がある。ひとつは、「例えば、理工系の学生を対象とする場合には、多少とも自然科学的色彩を帯びたテキストを選んだ方がいい」という考えだし、もうひとつは、「理工系の学生に対しては、むしろ逆に物語とか、歴史記述といったものを選び、語学の時間だけでも、自分の領域とは離れた世界に触れさせた方がいい。学生もそれを望んでいる」という考えである。学生の持ちうる関心についてのこうした二つの選択のどちらがいいかはむろん決められないし、その効果ははっきりした形で現れるはずもない。結局は、教授者自身の能力と好みによって、適宜選択するということになる。私の場合も、2年次の教材に関しては、さまざまな選択を試みた。

本学に就職してはじめて接した2年生のクラスで取り上げたのは、「やさしく読める自然科学の読み物 Textes de lecture pour les étudiants en sciences」と題された教科書で、「エコロジーと環境」、「森林」、「地球上の人間」、「都市化」といった章立てからもわかるように、森林破壊、消費社会といった、学習者がすでに日本語を通じては、そしておそらくは英語を通じても考えたことのある問題を、英語とよく似てはいるが少しずつ違う *écologie / environnement* といったフランス語の単語を通じて確認すべく促すという面を持っていた。またこのテキストは、日

本在住のフランス人教師が、はじめから教科書用書き下ろしのものであるため、語彙、表現にそれなりの配慮がなされ、さらに適当な脚注もついているという便宜もあった。

それになんと言っても、自然科学系の文章の利点は、動詞が「現在形」で用いられていることが圧倒的に多いということであり、この教科書も例外ではなかった。

次の年に選んだのは、これとはまったく趣を異にした長編漫画シリーズ「タンタン Tintin」のひとつ、「ファラオの葉巻 Les Cigares du Pharaon」だった。「タンタン」シリーズは、ベルギー出身のエルジェ Hergé が1929年に第一作を出して以来、欧米諸国の子どもに圧倒的な人気を誇ってきた bandes dessinées 物語漫画のシリーズで、一作が60ページほどからできている。主人公のタンタンは、利発で抜け目なく、行動的な少年で、愛犬ミルーといっしょに、いつも勇敢に悪人に立ち向かう。この種のテキストを教材として用いる利点は、絵の部分が状況の理解を助けるということはもちろんだが、多くのフランスの漫画がそうであるように、登場人物が喋りで、「吹き出し」部分が充実していることである。そして人物間の会話为主であるため、この場合も動詞は現在形で使われていることが多く、かつ、口頭表現を学ぶにはうってつけのような自然の話し言葉が次々と現れる。ただ教える側として気になったのは、取り扱われている場所（エジプトのピラミッド）、登場人物同士の関係、ヨーロッパ人とアラブ人の間に感じられる上下関係など、一昔前、ヨーロッパがアフリカ、アジアに植民地を持っていた時代の名残が感じられて、歴史的な目でそれを見ない限りは、いかにも古くさい感じを否めないことだった。そもそもこの教材選択の動機は、漫画、劇画に親しんできたと思われる学習者たちの関心を、引き易いの

ではないかということだったが、私よりも半世紀若い世代に属する学習者たちは、こうした雰囲気に対しては、どのように反応したのだろうか。

漫画を教材としたのは、「タンタン」の時だけだったが、次の年には、ジョルジュ・シムノン Georges Simenon のメグレ・シリーズから教材を選んだのも（2年次後期）、推理小説というもので学習者の関心を引ければという考えからだった（「メグレと老婦人 Maigret et la vieille dame」）。刑事メグレが活躍する作品群は、一時期の日本でもよく読まれ、私自身も愛読したことがある。しかしながら、改めて教材として使用してみるとやはり問題があるようだった。もともとシムノンの文章の魅力は、ゆったりとした独特の文体にある。そしてそれが、私の感覚では、ある種の爛熟に達した二十世紀ヨーロッパのブルジョワ社会、家族制度の記述、描写と微妙に結びついていて、「タンタン」とも共通する一種の古風な雰囲気を漂わせているのだ。また文章自体、語学的に見てむしろ平易だが、それなりに凝っている。そのため私は、フランスで外国人向けの教科書用として出版された「リライト版」（1100の基本語彙の範囲に抑え、内容を適宜縮約し、注釈、文法的な練習問題を付した）を使用した。以前も、何度か名作の「リライト版」を使用して、その功罪は承知しているつもりだったが、やはり実際に用いてみると、教える側として、絶えずなにかしらの物足りなさを感じざるを得なかった。その上、推理ものは本来、一気に読んでこそ面白味が感じられるものであり、教材としてそれを少しずつ読み進んでもあまり興味をそそられるはずがない。というわけで、推理小説を取り上げるという試みは、その時限りでやめることにした。

「タンタン」、「メグレ」両方の場合に感じられた「古め

かしさ」から抜け出るため、次の年には、現代の社会そのものを扱った教材を用いることにした。最初に取り上げたのは、「テレスコープ」と題された、一年次でも文法の教科書と併用して使われるいわゆる読本 (レクチュール) 向きの教科書だった。それぞれ4ページからなる各課の1ページ目は、10行ほどからなる会話文 (仏人と日本人の) と語彙の説明、2ページ目は関連した文法項目の説明、3ページ目は文法的な練習問題、そして最後のページには - これがこの教材の特色だと著者たちもうたっているが - 最初のページの文章と関連させて、フランス、ヨーロッパの政治制度、社会などを示す重要な言葉が、日本語訳、また簡単な解説といっしょに出ている。私も、それを踏み台として、「ヨーロッパ共同体」とか、実施を数年後に控えていた共通の通貨制度 (ユーロ)、またより広くヨーロッパの歴史といったものについて、学習者の注意を促すことができ、それなりに有益だったと思っている。ただ難を言えば、この教材の核となる文章が、10行足らずの会話であるため、ある程度の長さを持った外国語の文章を読み解いていく訓練はならない。

学年ははじめから使用した「テレスコープ」は、夏休みを挟んで10月半ばには終了したので、同じ学習者たちを対象に、形式は異なるがやはり現代の社会を扱った教科書「時事フランス語で読むフランスの『出来事』'98」をとりあげてみた。これは、主として前年1997年中にフランスで起こった政治、経済、社会的事件を紹介するもので、それぞれの課は2ページ半ほどの仏文と、日本語によるかなり詳細な内容説明がついている。全部で20課あるうち、はじめの5課しか読むことができなかったが、それでも、前年5月に行われた国民議会選挙の結果、保守系大統領と

は反対傾向の社会党が勝利を収め、その結果、保革共存という珍しい、それでも大統領を直接国民が選ぶフランスでは時々見られる政治状況などについて、学習者はある程度の知識を得ることができた。

この時事問題シリーズは、毎年同じ編者によって出版されていたが、2年後、「2000年版」を、今度は4月からたっぷり1学年かけて使ってみた。「98年版」が、前年の政治的話題を多く扱っていたのに対して、今回のものは、しばらく前にフランスのある地方で発掘された先史時代の遺跡、冬のアルプスでの遭難事故、フランス観光の中心地のひとつヴェルサイユ宮殿など、取り上げられたテーマも広がりを見せ、より学習者の関心を引いたように思う。ただそれぞれの課につけられた文法的な練習問題については、必ずしも適切でないものもあり、またあまりに単調な繰り返しを要求するものもあり、適宜簡略化して利用した。

ところで、「98年版」、「2000年版」それぞれを使用する間に、1年間の間隔をあけたのは、教授者である私の側からの欲求によるものだった。この時事問題シリーズは、確かに良心的に、工夫を凝らして作られ、それによって語学以外の面でも、学習者に有益な刺激を与えることができる。しかしながら、そのフランス語本文は、当然ながら、あくまで教科書風であり、学習者のために、明解に、容易にという配慮が目立つ (フランス語文の作者は、「やさしく読める自然科学の読み物」と同じ)。そうした文章に、何年も綿々と接するのは、「教材として」と割り切っていない、あるいはある種の苦痛を伴わざるを得ない (これは私個人の欠点かもしれない)。そうした理由で、この場合も、やや文学的な色彩を持ったテキストを教材として挟んだのである。

文学的と言っても、フランスでは有名な現代の童話「パ

「バールの冒険 Les Aventures de Babar」の最初の章を教科書版にした「子象バールの話」である。前任校でも何度か用いたことがあって、その素直な文章をこころよく感じていたし、語学的にも初歩の段階に適していると思っていた。本来子供向けの文章ではあるが、内容も楽しく、語学的にも、動詞の多くが現在形で用いられているといった点で、適切である。

こうして二つの時事問題教材の間に、「バール」を挟んだが、「2000年版」使用の後でも、同じような不満を覚え、再び童話を教材とした。ただし今度の場合は、現代の大人のための童話風読み物ともいべきもので、郵便配達夫、ホームレス、タクシー運転手、下水掃除人といった人々の、ささやかなドラマが、女性の繊細な筆で語られている（「アリストロッシュ Aristoloche」1980）。「バール」と同様、この教科書にも、時として、あまりに学習者に労力を省かせるのではないかと思われる説明がついている点が、私としては多少の不満ではあった。

童話と、内容、語り口などの上で類似したもの、民話、伝説の類いがある。ただし、語学的に見て、民話、伝説は必ずしも容易とは言えず、動詞の時制にしても、「現在形」の使用はむしろ稀で、「単純過去形」が多用されるのは、それがそもそも、「遠い昔に起こった出来事」の叙述であれば当然と言えよう。ただ、「単純過去形」という、初歩の文法ではふつう軽視される形を、少なくとも初めのうちは、教授者の方でゆっくり解説するならば、その他の点ではさして厄介な問題はない。他方、内容的には、超自然的な筋立てなど学習者の興味も引きやすいし、さらには、そこにさまざまな寓意を見て、現代における身近な社会問題などと結びつけることも可能である。

この種の文章は、日本でフランス語教科書として編まれたものもいくつかあるが、フランスでも、例えば地域ごとにまとめて挿絵や写真を加えたものがたくさん出版されている。私はそんな中から、「神秘的ノルマンディーの物語と伝説 Histoires et Légendes de la Normandie mystérieuse (1987, Éditions Sand)」から三つほど選んで読ませてみた。はじめの話「動物語 Le langage des bêtes」では、父親が、将来に期待をかけた一人息子を学校に入れる。3ヶ月後に「どんな勉強をしたか」と息子にたずねると、「犬の言葉を習った」と答える。さらに3ヶ月後には「蛙の言葉を」、次には「鳥の言葉を」といった返事しか返ってこない。無駄な時間（と学費）を費やした息子に対して業を煮やした父親は、隣人に息子を殺してくれと依頼する。ところがひそかに命を助けられた息子が、やがて習得した三つの「外国語」のおかげで大変な出世をすることになり、父親もその恩恵を受ける。むろんこの種の話は、現実とはかけ離れた筋立てをそのまま楽しむこともできるが、同時に、少し想像力を働かせれば、現在我々のおかれた教育事情、家庭環境などと関連づけることもできる。そうした点を少しずつ暗示しながら授業を進めたが、学習者もそれなりに内容を楽しんだようである。

最後に、教材として、フランス大革命の際に出された、「人間と市民の権利宣言 Déclaration des droits de l'homme et du citoyen」を、序文から、一八箇条全部にわたって取り上げたことを記しておこう。表現の上から見れば、決して日常的な平易な文章とは言えない。ただ、フランス、ひいてはヨーロッパの歴史の上であまりにも知られたこの文章に、実際に直接接したという経験を学習者に与えたかったのである。

1年次の場合には、学習者が復習・予習をしていないと言う原則で毎回の授業を行うことにしたとは、はじめに述べた通りである。2年次の場合はどうだったか。上述したように、テキストの種類もいろいろ変えていたので、そのテキストによって、またクラスの「雰囲気」に応じて、さまざまな方式をとった。「やさしく読める自然科学…」を用いたときは、本校着任直後だったこともあって、時間毎に、その場で名簿順に指名して、発音、訳読を行わせることから始めた。が、やがて、当てられても「辞退」する学生が出始めたので、予め2、3人を指名しておくことにした。その後、テキストは変わったが、おそらくは講読の授業としてはもっとも一般的なこの方式に従うことが多かった。ただ、物語漫画「タンタン」と「人間と市民の権利宣言」を取り上げた際には、思い切って別の方式にした。対象とするテキストのある程度の長さの部分を指定して、それをその場で、各人が仏和辞典、また1年次の時に用いた文法の教科書などを参照して、なんとか独力で(友人と相談することなく)、解説するよう仕向けたのである。むしろ、例えば分詞構文といった初歩の段階ではあまりふれられない形が出てくれば、こちらで説明し、訳を与える。がそれ以外、動詞の変化形などについては、その不定形を自分で考えさせる。そして、少しずつヒントを与えながら誘導していく。これはかなりの「忍耐」を、学習者にも教授者にも要求する作業だった。ヒントの出し方が多すぎたり、早すぎたのでは、「自分で考える」という方針に反する。かといって、時間的制約もある。すでに述べた1年次の学習者を、原則として、予習復習をしなかったと想定して扱ったのと同じ方式である。授業時間90分を三分し、一区切

り毎に誰かを代表として指名し、その結果を述べさせ、適宜訂正した。さらに、理解度をチェックするために、ひんぱんにレポート形式で訳文を提出してもらい、「てにをは」上の過ちなども直して返却した。フランス語の勉強とともに、かなり日本語を書く訓練もなったはずである。

(3) 学習者の顔を見ることなく:本校着任後も、私は、制度の許す限り他のいくつかの学校でもフランス語を教えることができたが、その場合も、学校による気風の違いはもちろんあったが、上に述べた教授方針と根本的には同じ方針に従った。ただ、着任以前の1989年10月から7年間、つまり着任直後まで、毎年6ヶ月ずつNHKラジオで、「フランス語講座」を、またそれとはほぼ同時期、これは毎週一回15分ずつ、海外向けの「日本語講座」を担当したことがある。両者は当然、教場とは別の体験であり、時期的にも少しずれるが、簡単に触れておこう。

i) 「フランス語講座 (中級)」: ラジオの中級講座は、当時も毎週金曜日と土曜日に、20分ずつ行われていた。現在では、3ヶ月をひとつの単位として、担当者も交代するようだが、私が担当していた頃は、年間を、四月から九月までの前期と、十月から翌年三月までの後期に分け、私は後期の方を担当した。そこで私が目指したのは、学習者に、フランス語を通してフランスの歴史、文化に「直接」触れてもらうということで、そのためには、適当なテーマとそれにまつわるテキストを教材として選び、それをめぐって、しかるべきフランス人になにかを喋らせるという方式をとった。テーマとして取り上げたのは、ちょうど200年記念に当たっていたフランス革命をはじめとして、フランス人の旅、女性の文章、その時々的人气作品などで、

幸い、豊富な知識を正しくきれいなフランス語で明確に表現する能力を備えた仏人の協力を得られ、かなりの程度成功したのではと自負している。もっとも、聴取者からの質問、時としては厳しい口調の叱責などを受け取ることもあったが、それは仕事を続ける上でかえって励ましとなった。

また、放送での作業は、有形無形に学校での授業にも影響を及ぼしたが、その中でいちばんはっきりしていたのは、放送では、毎回20分という放送時間を、どう割り振って使うかを予め厳密に考える必要があったことから、それまであまり90分の授業時間内部の配分を考えなかったのだが、「何分間は...」、「次の何分間は...」と、学習者の緊張度合いなどを考慮して考えるようになったことである。これについては、次に述べる国際放送での経験も、同様に働いたと思う。

ii) 「海外放送=日本語講座」：雲を掴むような話という表現があるが、NHKが茨城県の一角から発信する電波は、アフリカ大陸ガボンで強められ、ヨーロッパの短波受信装置にキャッチされる。はたして私と協力者である専門のアナウンサー、また声優の声が、本当にそこまで届いているのか、慣れないうちは頼りない気もしたが、毎週一回15分ずつ、ごく初歩の日本語と、日本の生活、文化の紹介をフランス語で行った。生活、文化の紹介としては、放送日の季節に合わせて、その頃日本ではどんなことが行われているか、かつてはどんな習慣があったか、それがどのようにして失われてきたかなどを述べるが多かった。たとえば、秋の初めの虫の声、昔の日本の都市で聞かれた音、たとえば、物売りの声などが、今ではほとんど聞かれなくなったことなどである。そんなことを放送して暫くしてから、南仏ニームに住むある聴取者から、自分の町で聞かれ

る音を教えてくれる葉書が来たりして、当たり前のことながら、放送が本当に聞かれているのだと今更のように安心したことを覚えている。

(4) フランス語を学ぶ動機づけはあり得るのか：

かつて私が、フランスの大学で、「フランス語教授法」なるセミナーに参加していた頃、一人の参加者が、「フランス語を学ぶ動機を学習者に与えることが大切である」と言うのを聞いてげげんに思ったことを思い出す。当時の私は、フランス語の授業に出席している学生は、誰もが「フランス語を学ぼう」という意欲を持ち、その動機などいちいち問いただすにも当たらないと考えていたからである。少なくとも、大きな動機づけは社会が行っているものであり、それにも拘わらず「やる気がなければ」、それは学習者の怠慢に他ならないというわけである。現在の教場での状況は、それとなんという違いだろうか。正直言って、現今教場での学習者にさしたる動機づけを感じることはできない。もっとも「やる気のなさ」を、学生諸君の責めにのみ帰することはできない。大学に入った者は、文科系理工科系を問わず、大半が英語以外の外国語をもう一つおさめようと思つて、ドイツ語なり、フランス語なり、中国語なりの教室にやってくる。大学でのカリキュラムがそうなっているのだし、大学に入ったのだから、もう一つくらい、いわば大学のステータスのひとつとして「第二外国語を」と考えても不思議はない。それでいいのだし、私自身の世代のことを思い出しても、同じようなものである。ただ、実際にコースが始まり、文法なり、発音なりを具体的に習得する段階になると、もう少しはっきりした、なんらかの動機が必要になる。フランスに旅行をしたいとか、知人が滞在して

いるとか、個人的な動機でもいい。そうでなければ、日本の社会が、それぞれの言葉、もしくはその言葉が用いられている国とどのような関係にあるかの問題になってくる。私の属する世代と、現在の大学生との違いはその点で、きわめて大きいと言わねばなるまい。

日本とフランス、もしくはヨーロッパとは、現在日本の大学生世代の感覚の中でどのような関係を持っているのだろうか。第二次大戦後しばらくの間までは、日本は欧米に向かつて開かれ、しかもその間には多少とも優劣の感覚、つまり、欧米、特にヨーロッパの方がすぐれているといった感覚が残っていたように思われる。むろん、欧米にしても「罪深いこと」をさんざんしてきたことは、重々承知でありながら、それでもなにかしら、欧米の方が進んでいるといった感じである。特に、私もその一人であるが、日本が第二次大戦後の混乱期をようやく脱しつつあった頃に、ヨーロッパに留学した者は、多少ともそうした感じを抱いたのではあるまいか。今から思えば、私がはじめてフランスに滞在した1957～60年代のフランスは、当時はまだ植民地だったアルジェリアの独立運動（戦争）を抱え、国内でもフラン貨幣のデノミネーションが実施されるといった混乱の時期だったはずなのだが、一人の外国人留学生である私の目には、もっぱら、個人主義が確立し、しかも有給休暇や年金制度など、社会保障制度が整った「立派な民主主義の」国として映った。

その後、東京オリンピックを経て、一時は「奇跡」とまでもてはやされた経済発展を遂げた日本が、少なくとも一部のフランス人からは、「模範」として眺められたのも事実である。今では考えられないような日本語ブームが、一時期続いたのは、私がしばらく勤めたことのあるパリの「東

洋語学校」での経験からも明らかである。他方、日本人にとって海外旅行が容易になって、フランスも今までよりも、ずっと身近な存在となった。おまけに、パリに行って観光スポットを訪ねたり、土産物屋に入ったりしても、日本語でこと足りることが多いし、地方の名所旧跡などへ足をのばしても、日本語の案内書、音声案内が備わっているところが少なくない。またかつては英語嫌いの感があったフランス人も、今では英語を話す人が少なくない。となれば、苦勞してフランス語を習得する意味があるだろうか。

むろん、大学生一般に見られるフランス語に対する動機づけの減少が、こうした単純な図式だけによるものとは考えられないが、少なくとも、日本社会全体が、どのようにフランスに今関与しているかが、大きく作用していることは間違いないまい。そしてその関与の中には、例えばサッカー・ワールドカップでのフランス・チームの勝敗、あるいはフランス人監督の活躍ぶり、フランス人社長による会社の建て直しといった、一見ごく一時的、例外的現象と思えるものも、意外なほど力を持っているのだ。

(5) フランス語「ブーム」：大学での第二外国語

という場で見限りは、フランス語の衰退は否定できないが、逆にこれまで以上にフランス語学習者がふえている場を見逃すこともできない。それは、「フランス語能力の検定試験」という形によるものである。現在の日本で、大学、あるいは専門学校以外の場で、何らかの形で、自分のフランス語の能力を公的に証明してもらうには二つの方法がある。ひとつは、「フランス語教育振興協会」が年二回実施している「実用フランス語技能検定試験」を、もうひとつは、フランス政府が、在日フランス大使館の文化部を通して実

施している検定試験 (DELF / DALF) を、利用することである。両者とも、いくつかのレベルに分かれていて、読解力とともに、聞き取り、口頭表現の能力が要求される。むしろ、「英検」、《TOEFL / TOEIC》などに比べれば、その受験者数は少ないが、それでも私自身が出題、採点（筆記、口述両方）で経験したところでは、多くの受験者がかなりの水準にあると言えよう。とりわけ、口頭表現においては、私自身の世代、あるいはそれ以前においてはおそらく考えられなかったような技能を身につけた人たちに会うことも稀ではなくなっている。すでに述べたように、海外旅行あるいは滞在が、以前よりずっと容易になり、なによりも気軽にいられるようになったこと、またそれと並んで、視聴覚機器、教材の発達がこうした成果を生んでいるに違いないが、日本の社会に、新しいフランス語習得の動機づけが生まれていることも確かだ。

この現象が同時にまた、外国人における日本語の口頭表現のレベルアップと平行しているのは興味を引かれる。かつてはむしろ、日本語のような特殊な言語は、外国人には習得不可能であり、ほとんど理解できないような訛りがあるのが、ふつうだなどと考えられたものである。それが今やどうだろう、テレビでラジオで、あるいは別の場所で、日本人と遜色なく日本語でわたりあう外国人を見るのは、決して珍しいことではない。そしてこの現象は、日本人の語学習得にとっても、大きな利益をもたらす。まず第一に、日本の学習者にとっても、単純な意味でも「お手本」となる。さらに、日本人が語学を習得するために教師としてどうしても必要な、その言葉を母語とする人間が、彼らもまた日本語を「一生懸命」勉強して、それなりの成果を上げていることが、日本人の学習者の心理的な励みとなるから

である。いわば、一方交通ではない、バランスのとれた文化の交流が実感されるが、そうした状況にこそ外国語習得のための基本的条件があるのではなかろうか。

(6) フランス語に求められた脱皮：私自身がフランス語を学び始めてから、あるいは、教え始めてから、日本の社会は大きく変化した。フランスに対する立場ひとつをとってもそれは著しい。しかし同時に、フランスの社会の変化も激しい。そしてそれに呼応するかのよう、フランス人自身の母語に対する、また外国語に対する考え方もずいぶん変わった。1950年代、つまり私がはじめてフランスに滞在した頃、フランス人にとっては、自国語こそが絶対であり、外国人旅行者がふつうのホテル、商店で英語で話そうとしても、受けつけてくれない。ましてや、日本語での応答など問題外である。「明晰ならざるものは、フランス語にあらず」に代表されるような自国語中心主義が、いまだにまかり通っているかのような印象さえ持った。それから十年ほどを経て、二度目にフランスに滞在したときは、様子がずいぶん変わっていた。多くのホテル、商店で、客を英語で迎えようとする努力が見られたし、圧倒的に多くなった日本人観光客を引き寄せるためか、日本語での掲示などが、店先に目に付くようになっていた。

こうした外国語を受け入れようとする姿勢と並んで、この時期のフランスで注目されたのは、「外国語としてのフランス語 français langue étrangère FLE」を外国人に習得させようとする努力が、政府レベルで本腰を入れて行われたことである。この努力は、明らかに、フランスの移民受け入れ政策と結びついていた。外国からの移住者が、なるべく早くフランス語をおぼえて、仕事の上でも、また日常生活

活でも不便なく暮らすようにしなければならない。そのためには、これまでのように外国人に対しても、あたかも母国語を習得するようにフランス語を学ぶことを要求していたのでは実際的ではない。そこで、単語、熟語に関して、日常的にどうしても必要なものを選び出す。このさい、たとえば、市場に行って指で指せばわかるものは、後回しになる。「トマトを三つください」と言わなくとも、トマトのある前で、「これを」、あるいは「あなにも言わずに指で指せば」「トマト」という単語を知っている必要はないし、そこにいるのは買いに来ていることは明白だから、「ください」も必要ない。また「三つ」にしても、小さい数なら指でこと足りよう。これをつきつめれば、自分で必要なパックを取り上げて、レジに持っていくというスーパーマーケット方式ということになるが、「トマト/三つ/ください」のうち、どれかひとつでも口頭で言えれば、売り手と客の間には、なにがしかの感情的「潤い」が生まれるに違いない。コミュニケーションという作業には、当然こうした感情的な面もあるから、そこまで考慮に入れて、まず記憶すべき語、表現が統計調査の上で打ち出される。他方、学習者の母語によって、フランス語習得のさいの困難が違って来る点に注意が払われる。たとえば、日本人にとってフランス語発音のさいの困難は、[r]、[u]、[y] などだし、ドイツ人にとっては、濁音と清音の区別(らしく)、またこれは逆の場合だが、フランス人にとっては、[h] という氣息音が出しにくい。こうした点を考慮して、それぞれの言葉を母語とする学習者別に、なるべく決めの細かい配慮をした教材を作る。もちろんそのさい、学習者にとって興味を引くような動機づけの工夫が凝らされる。こうして生まれたのが、《En France, comme si vous y étiez》、《La France en direct》、

《Le Printemps》と言った数多くの視聴覚教材である(そのうちいくつかには、「スペイン語圏用」、「英語圏用」と別々の版が用意された)。

つまり、一方では、自分たちも積極的に外国語を学んでそれを使おうという、以前のフランスではあまり見られなかった姿勢、他方では、外国人にはあくまで各人の母語を尊重しながら、コミュニケーションに必要な、ふつうの言語の一つとしてフランス語を使ってもらおうとする姿勢で、互いに表裏をなすこの二つは、新しい世紀でフランス語が占めようとする位置を象徴するものと言えよう。

(7) 視聴覚教材の制作者たちが考慮しなくてはならなかったもう一つの点は、いったいどんな、もしくはどの、フランス語を教えるべきかということだった。むしろ歴史的な古いフランス語は論外としても、ひとくちに現代フランス語と言っても、さまざまな「種類」がある。世代間、地域間の違いは無視して、いわゆる「標準語」を教えるべきだろうか。結局はそういうところに落ち着かざるを得ないかもしれない。しかしそれにしても、「標準語」なるものが、実はかなり抽象的な、現実の言葉とは離れたものであることは意識していなければならないまい。この問題は、もし我々が、母語である日本語を外国人に教える立場に置かれた場合を考えただけでもはっきりする。丁寧さにおいて、まず無難と考えられる「...です/...ます」文体を教材の中心に据えるにしても、我々の日常生活の言語は、始終それをはみ出している。それに、日本語と同じように、フランス語もここ数十年の間に、ずいぶん変わっている。よく引き合いに出されるのは、鼻母音[œ]の、鼻母音[ɔ̃]への吸収だが、他にも、親しい相手と話しかける二人称 tu の

多用、英語からの借用を中心とする無数の新語など、そしてひんぱんにフランスに旅行、滞在するわけでもない私すら気づく変化の数々がある。また地方による変化もそれに付け加わるから、「フランス語」とだけ言ったのでは、あまりに漠然とし過ぎているのだ。さらに、これはすでにフランス語学習教材の制作者の領域をはみ出すことだが、フランス語がいつもフランスという国にだけ結びつくものではないという事実も忘れてはならない。フランス語を公用語の一つとしているベルギー、スイス、カナダなどにおける言語状況は言うまでもなく、いわゆるクレオール・フランス語 *créole français* の存在も、視野に入れておかなければならないだろう。

終わりに：日本における外国語の受容、教育は、ヨーロッパの言語だけに限っても、長い歴史を持っている。そして、私自身がフランス語教師としてその一端を担った期間だけに限ってみても、その間の変化には、甚だ大きなものがある。教壇に立ち始めた頃は、あちこちで仏文関係の学科が漸設され、フランス語教員のポストもふえ、いわば上昇気流に乗った年月だった。がやがて、大学生は「英語の他に、ドイツ語、もしくはフランス語を」という伝統が次第に薄れ、英語がこれまで以上に広まると同時に、あちこちの大学で、中国語、ロシア語、スペイン語などに対して門戸が開かれることになった。そして、この新外国語への門戸開放は、大学レベルでは多くの場合、ドイツ語、フランス語の教員の人員削減によって、財政的な状況合わせを行いながら進行的に進められた。学生の履修希望も、中国語が圧倒的に多く、その分ドイツ語、フランス語は減少した。カリキュラムの上でも、いわゆる第二外国語が、「選択必修科目」の座から、「選択科目」の座へと移された学校もある。

こうした傾向は、私が前任教に居た最後の十年ほどの間にすでに急速に進んでいて、本校に移った頃には、多くの大学で、新しい外国語への門戸開放の流れすら、一時の勢いを失い始めていた。少子化傾向の前で、危機にさらされる大学にあって、第二外国語に対する見方は厳しい。はたして、財政的な、またエネルギーの上でも無駄な出費として、切り捨てるべきなのか。

今後、大学での外国語教育、とりわけ「第二外国語」の教育はどうなっていくのだろうか。大学からいっさいの外国語学習を追放し、それは市井の専門塾的な設備にまかせるという考え方はあり得る。しかし、もし、やはり英語能力の面倒も見ようというのであれば、「英語だけ」というのはよくない。英語も、日本語と同様に、数ある世界の言語の中のひとつに過ぎないのだという考え方ができるためだけにせよ、できるだけ多くの他の言語の習得が可能であるようにすべきである。なるほど、現代世界における英語は、イギリス、アメリカという特定の国、地域の文化を離れて、むしろ世界中の人間が意思を通じ合えるための手段と考えられていることは確かだ。が、それにも拘わらず、我々は英語という言語を通じて、アメリカを中心とした世界にもつばら目をやりがちである。こうした「片寄り」を正すためにも、少なくとも、アメリカを相対化するためにも、もう一つ別の言語を学んだ方がよいのだ。(むろん、「別の」という言葉の内容には議論の余地がある。フランス語もドイツ語も、結局はヨーロッパの言語として、英語と「同じ」ではないか。「別の」と言えるのは、例えば、中国語、アラブ語などではないのか。)

フランス語にせよドイツ語にせよ、言葉としての学習で

はなく、フランスなりドイツなりの国の文化を、歴史を学んだらどうかという意見がある。私も、基本的にはそれに組みする。ただその際の科目名は、「フランス文化 A/B」ではなく「フランス語文化 A/B」とでもすべきだろう。広い意味でのフランス語文化圏を対象として、しかも、あくまで、「言語を通して」の文化への接近が望ましいからだ。そしてその際、教授者は、「語学」の教師であるべきである。言葉に対する特別な思い入れを持つ人間が、己の感覚を、姿勢を通して、その言語の表現する文化を学習者に伝える努力をすべきである。

フランス語に、《jeu》という単語がある。いわゆる「多義語」のひとつで、その語義は、仏々辞典また仏和辞典でも、十以上の項目に分類され、それにさらに多くの述語的表現が並べられるのがふつうである。日本語の「遊び」にはほぼ相当するが、芝居や音楽演奏などでの演技も含む。Alain Rey (Le Robert Dictionnaire historique de la langue française Nouvelle Édition 1993) は、「自由な楽しみ」と、「体系づけられ、組織だった活動」の両方を意味するものとして、この語を特徴づけている。もともと、この両者を截然と区別することは難しく、たとえば、スポーツ競技にせよ、あるいはトランプ遊びといったものにせよ、しっかりとしたルールがなければ成り立たない。が、同時にそのルールを忘れることも、本当に楽しむためには必要となろう。さらにこの単語は、人間の活動をこえて、人間の作った機械に（「ブレーキペダルの遊び」といった場合だ）、また、自然現象にも（水に映って漂う光、影、噴水のダンス *jeux de lumière, jeux d'eau*）、適応されていく。そしてそのひとつに、《jeux de mots》という表現もある。文字通りに訳せば、「言葉の遊び」だが、ふつういわゆる「洒落、

駄洒落、かけことば」を意味する。ちょうど、光が、水が、たゆたうように、言葉が「たゆたう」のだ。遊んでいるのは言葉か、人か。おそらくそのどちらでもあり、どちらでもないのだろう。そんな時間が、空間が大学の中にあってもいい。そして、それに当たるのが、「フランス語の授業」であるといえ。